



その20

惟喬親王 —これたかしんのう—

(令和元年5月1日号—第320号)



惟喬親王は、平安時代の貴族で、承和11年(844)に文徳[もんとく]天皇の第1皇子として生まれました。母は、紀名虎[きのなとら]の娘の静子[しずこ](三条院)です。

文徳天皇は、惟喬親王を皇太子にしたいと考えていましたが、藤原良房[ふじわらのよしふさ]の娘の明子[あきらけいこ]が文徳天皇との間に第4皇子の惟仁[これひと]親王をもうけると状況が一変しました。当時の最大権力者であった藤原氏と、紀氏の力の差は歴然としており、藤原氏の圧力により、惟仁親王は、わずか生後8カ月で皇太子になり、その後、9歳で即位して清和[せいわ]天皇となりました。

皇位への望みを絶たれた惟喬親王は、政治から遠ざかり、詩歌の世界に没入していききました。親王は、交野ヶ原にある別荘の渚院[なぎさのいん]を年ごとに訪れては花盛りの桜をめでたといわれ、親王につき従った側近が、歌人として有名な在原業平[ありわらのなりひら]です。

業平を主人公とした歌物語の『伊勢物語』では、親王や業平たちが、渚院で花の宴を楽しんだ様子が描かれています。それによると、従者たちは、桜の下で和歌を詠み、業平は、「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」という著名な歌を残しました。これは、桜の美しさをたたえるとともに、親王の悲運を思いやる歌であったともいわれています。

貞観14年(872)、親王は、病のため29歳のときに出家し、比叡山麓の小野に隠棲しました。その後、寛平9年(897)に54歳で没しました。

渚院は桜が大変すばらしく、都の貴族にとって、あこがれの名所であったといわれていますが、その後、荒れ果て、観音寺と呼ばれる寺が建てられたとされています。観音寺は、明治3年に神仏分離により廃寺となりましたが、現在、その跡地には、鐘楼と梵鐘が残されており、ともに市の有形文化財に指定されています。



渚院跡とされる旧観音寺の鐘楼と梵鐘(場所は渚元町)